

## 審査報告

本年度の文部科学大臣賞の選考は、令和六年四月一日から同七年三月三十一日に至る一年間に刊行された連歌・俳諧・俳句に関わる著作が対象となる。その中から候補となる著作七点を厳選して各委員に確認した。選考委員七名によるそれらの綿密な査読、その結果を持ち寄り、慎重な審議によって選考が行われた。その結果、矢羽勝幸著『新考 俳諧論集』（令和七年三月、私家版）を最優秀著作として推薦することに決定した。

以下、著作の概要、ならびに各委員の推薦文と当日の選考会議をもとにした審査概要を記す。

著者傘寿の自祝著書である本書は、十編の論文からなる『論文篇』と『付篇』とから構成される。『付篇』には「著作目録」「近世俳人書簡集目録」「信濃古俳諧通覧目録」が収載される。著者は、これまで一茶はもとより、加舎白雄・鈴木道彦・榎本星布・常世田長翠ら中後期の俳人の事蹟と俳諧の様相を、膨大な資料を読み解くことで明らかにしてきた。

『論文篇』（章番号は、中嶋が付した）では、「新たに判明した『おくのほそ道』の直江津・高田の俳人たち」（第一章）。「新出・安永六年高井几董宛て与謝蕪村書簡」（第二章）。第三章「高桑闌更の江戸二夜庵開庵前後」では、逸書と推定されていた、高桑闌更安永三年十一月の江戸二夜庵記念集『萩の枕』（氏の推定）の紹介と翻刻資料を中心に論じた。「加舎白雄と一茶」（第四章）。第五章の「一茶と元政―一茶の描いていた元政像」は、元政の著と信じられてきた偽書「深草元政房壁書」の二種類の写本をあげ、その影響について述べる。『西国紀行』の「一茶」（第六章）。第七章「鈴木牧之『十評発句集』の成立について」は、豊富な資料を駆使して、新潟県善光寺二面の俳諧額奉納のおり刊行された鈴木牧之『十評発句集』の、発起・募句・選句の過程を詳細に検討した。本章では、書簡を基軸として同時代の江戸座・雪中庵・美濃派の動向を押さえ、俳諧の大衆化という視点で時代の全体像が描き出された。「新たに判明した鈴木牧之と成沢雲帯の交遊―越後貝掛奉額句合一件」（第八章）。第九章「俳文学者月院社何丸の生涯」は、『七部集大鏡』『芭蕉翁句解参考』の著者として知られる月院社何丸の生涯について、現在知りうる資料を網羅したもので圧巻である、氏の『俳人鈴木道彦の生涯と作品』（平成二六年）とともに、化政期から天保期の俳諧研究の基礎となる成果である。「放浪俳人井上井月の美濃行脚」（第十章）。

本書の論題は、以上のように多岐にわたるが、一茶・白雄に、白雄と対立する立場にあつた闌更を加えて一書の柱とすることで、三者を相互に関連させながら中興期から文化文政期にわたる俳壇の種々相とその実態の一面面を浮かび上がらせた。本書は、著者の研

究に対する真摯な姿勢が十分に発揮されており、俳諧文芸の基層を  
広い視野から考察・位置付けた論考は説得力のある堅実なものとい  
える。

令和七年八月四日

文部科学大臣賞選考委員会  
委員長 中嶋 隆